

4月30日 ヨハネによる福音書6章34～40節 今日の説教から

説教題：「命のパンをいただくために」

旧約聖書の時代では、労働は「神様からの罰」として理解されていました。創世記3章では、神様から食べてはいけないと言われていた実を口にしてしまったアダムとイブは、神様から罰を受けることになりました。永遠の命のはく奪と共に、苦勞をして労働を行うという罰が与えられています。

そのように理解していたユダヤ人たちに対して、イエス様は今日の個所で「わたしが命のパンである」と語り掛けているのです。この言葉は、今日の個所の直前でイエス様が群衆へと語った、「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である」という言葉に続いて語られている言葉です。私たちは生きる糧を得るために労働を行います。それは、逆を返せば、どれだけ労働を行っても、そのお金で得た食べ物や飲み物は消費すればなくなってしまふ、ということです。満たされるために労働を行う、しかし私たちはどれだけ労働を行っても、どれだけ飲んでも食べても、また少し時間が経てばのどがかわき、お腹が空くのです。決して満足することが出来ない、いつも飢え続けている、それが、アダムから私たち人間に課せられた、大きな罪に対する罰なのです。

イエス様は、私たちをその「飢え」から解放してくださると、イエス様が「いつまでもなくならない命のパン」を私たちにくださると、今日の個所には記されています。決して飢えることがなくなる、決して乾くことがなくなる。私たちにとって、イエス様とは永遠の命のパンの源であり、永遠の生ける水の源なのです。私たちはイエス様によって常に満たされて、満足することが出来るようになるのです。

これは単純に、言葉の通りに私たちが「お腹が空かなくなる」わけではありません。そうではなく、イエス様は、私たちの「魂の飢え・渇き」を満たしてくれる方だということが、今日の個所には示されているのです。聖餐式のパンも、今日の個所で言われている「命のパン」であると言っていいでしょう。私たちは聖餐式を行う度に、「これはイエス・キリストの体である」という言葉を受けて、パンを、ぶどう酒を受け取っています。それを食べるということはつまり、私たちは聖餐式の度にイエス様自身を自分の中に取り込み、イエス様によって自分を満たすということを経験しているのです。

皆さまは、どのように聖餐を受けているのでしょうか。聖餐式をするのが当たり前だと感じているのか、その一回一回の聖餐式を大切にすることができているのか、パンと葡萄酒を受け取るたびに、「自分はこのパンに、ぶどう酒にふさわしく生きることができているのか」と自分の歩みを振り返ることが、できているのでしょうか。自分の歩みを振り返り、なかなか正しく歩むことができていない自分の人生を見つめなおして、それでもなお私たちのことを招いてくれている神様のことを、その慈しみの深さに感謝をしながら、パンと葡萄酒を受け取ることができているのでしょうか。そして、自分たちが受けているそのパンとぶどう酒によって、「永遠が約束されている」と、強く感じる事が出来ているのでしょうか。

来週の聖餐式まで、その歩みを振り返ってみてはどうでしょうか。きっと、私たちの人生の様々な場所で神様の助けと恵みがあったことに気がつくことでしょう。御言葉に生かされて、この一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 6 章 34～40 節

- 34:そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」